

2017
おもろ
チャレンジ

スリランカにおける インド・タミル人清掃労働者の研究 －差別に抗するマイノリティの日常実践

アジア・アフリカ地域研究研究科

一貫制博士課程 1年

清水 加奈子

スリランカ

2018年1月29日-

2018年3月29日



渡航概要と内容

スリランカに約2か月滞在し、北西部州のあるタミル人清掃労働者の集住する集落に住む人々へのインタビュー調査を行った。世帯数103、人口の推計は約300人の集落である。約半数程度の世帯に、この集落が存在する地方自治体に雇用されている清掃労働者が居住するとみられ、この集落の人口の9割以上が、スリランカ全体としてはマイノリティにあたる（人口の約2割程度を占める）タミル人である。この集落は主に長屋と戸建て住宅で構成されており、明確に他集落との境が分かるようになっている。この集落に対しては同じ町の住民から否定的な評価がされており、集落内に入ることや共に食事をするなどには嫌厭されている状況にある。このような状況がいかに形作られてきたかを知ることで、民族や宗教、カーストや職業など様々な要因によって生じる分断の源泉とそれを越える可能性を追求したいというのが自身の根本的なテーマである。

渡航中に起こったトラブルとして、調査活動には直接は関係がないが忘れられない出来事は、スリランカ中部州および東部州での暴動事件と、それを受けて3月6日から約10日間におよぶ非常事態宣言が政府から出されたことである。滞在地は暴動が起きた場所から離れており、幸いにも直接の影響はなく済んだ。暴動のきっかけは自動車同士の接触事故だったと聞いているが、当事者の一方がシンハラ仏教徒であり、もう一方がムスリムであったため、それぞれが住む集落同士の衝突に発展したという。過激派の仏教徒の扇動もあり暴動が大きくなる可能性があったため、早めに非常事態を宣言し、該当地域には外出禁止令を出し、軍と警察を投入して事態の早期解決をはかった、というのが実際だったようである。

非常事態宣言発令の翌日からは、暴動を助長する可能性があるとして、一部のソーシャルメディアが政府によって約1週間規制され使用できなくなった。具体的にはFacebook、Facebookの一機能でもあるMessenger、Instagram、また日本ではユーザーがあまり多くないと思われる

が Viber、Whatsapp、等の使用ができなくなった。一方でスリランカでのユーザーが少ないと思われる Line や Twitter などのメディアは規制されず使用することができた。私自身は日本の友人や家族との通信のほとんどを、Messenger を使って行っていたため、当初は非常に困った。その後、他の手段で通信をすることができたが、複数の通信手段を考えておく必要があることを思った。

スリランカにおける非常事態宣言は内戦が終結した 2009 年以來ということで、事の重大さが伺えるが、日本においてはあまり報道されていなかったとも聞いた。ちょうど非常事態宣言中にスリランカ大統領が日本を訪問していたのだが、それでも日本に住む友人の中にはスリランカの状況を知らない者がおり、残念に思った。

渡航を通じて感じたこと・学んだこと

今回の渡航で行った調査によって、調査対象であるタミル人清掃労働者のコミュニティに住む人々の多様性が明らかになった。

まず、タミル人としてアイデンティティを持っている人々の中にも、マジョリティであるシンハラ人をどちらかの親に持つ人々が存在した。そういった人々は氏名をシンハラ式のものからタミル式のものに改名し、そしてその子や孫がコミュニティの中に広がっており、「純粋な」タミル人である人がどれだけいるのかを確認することは不可能であることがわかる。また植民地時代に南インドから移住したタミル人であるとされているタミル人清掃労働者であるが、実際には、植民地以前に移住したタミル人が多く住む東部州、北部州からの移住者もあり、植民地時代に移住したタミル人だけが構成員であるとは断言できない。

また植民地時代に労働者として移住したタミル人は低カーストの集団だといわれているが、調査地においては高カーストあるいはミドルクラスのカーストを名乗る者もいた。そしてこのコミュニティには居住していない少数の清掃労働者の中にはシンハラ人も存在する。このシンハラ人達は一律に、自身はシンハラ人の中で最も高カーストであるゴイガマだと名乗った。

こういった多様性にも関わらず、なぜ清掃労働者コミュニティは、比較的最近の移民であり低カーストのタミル人が構成員であるというようにステレオタイプ的に語られるのだろうか。こういった傾向は市民の間だけでなく現地の研究者の言説からもうかがえた。もちろん歴史的には清掃労働が特定の民族やカースト集団によって担われてきた可能性は否定できない。しかし、現在の状況については、被差別者のバックグラウンドを自分達からかけ離れたもの



にしようとするため、特定の職業集団に対して、(実際にはその職業をもつ人々の民族やカーストは多様であるにも関わらず) 特定の民族やカースト集団であるとラベリングし被差別者が差別されるべき理由を用意し続けているようにも思える。

歴史的にどのように清掃労働者コミュニティが編成されてきたのかを、引き続き調査することによって、差別的な状況の構造も明らかにできるだろう。

■ 今回の経験をどのように今後生かしていくか

今回の約2か月の滞在で、スリランカにおける現地滞在は累計1年10か月となり、現地での人間関係は着実に強固なものとなってきているが、滞在期間が長くなるにつれて個人やその地域が抱える生活上の問題がより深く見えてきた。そういった問題の多くはスリランカの社会、経済などに深く根差したものであり、スリランカにおいて生活基盤を持たない、「外国人」である自身は個人的に助けになることも難しく、無力感を覚えた。言語や習慣、価値観をある程度理解してくると、時に互いが圧倒的な他者同士であることを忘れてしまうが、改めて彼と我が他者であることを思った。しかし幸いなことにこれからも、研究という形でそれらの他者と関わり続けることができる。他者でありながら関わりを持ち続けるということが「彼と我とを分け隔てる思考の源泉とそれを越える可能性を見つけない」という志望動機書に書いた挑戦を続けることにもなるだろうと思う。



■ 今後本プログラムを希望する学生へのアドバイス

このプログラムを使って渡航する人が、初めての地に渡るのか、これまでも行ったことのある地に行くのかわからないが、初めて行くのであれば、ぜひ長く滞在し、その土地との縁が深く結ばれることを祈っている。

■ 主な奨学金の使途

*渡航費

*滞在費

*資料収集費

*通信費 など